

## 自己評価と対人的反応の關係に影響を及ぼす要因についての一研究

—— コミットメント要因と協同、競争事態要因について ——

長 戸 啓 子

### 目 的

自己概念を体制化し、その体制を維持しようとする傾向は人間が基本的に持っているものということができる。自己概念の体系へ入り込む経験の中で、その自己概念と矛盾する経験は抵抗に出会い、防衛によって否認されたり歪曲されたりする。心理的不適応は、経験が自己概念のゲシュタルトに体制化されない時に感じられ、心理的適応は、経験が自己概念のゲシュタルトに体制化される時に感じられる。自己概念の形成に重要な役割を演じるのは他者との評価的相互作用であるが、自己概念の維持に最も重要な役割を演じるのも他者との評価的相互作用といえる。自己概念を最も強く支持するのは、自己概念と一貫する他者からの評価であり、自己概念を脅かすものは、自己概念と矛盾する他者からの評価である。

Heider のバランス理論や Festinger の認知的不協和理論などの consistency theory に自己評価を導入した場合、自己評価と一致する評価を与える他者に好意的態度を持ち、自己評価と矛盾する評価を与える他者に非好意的態度を持つということが導かれ、これは前述の自己概念の維持という見解を支持する。

一方、自己評価のいかんにかかわらず、我々は社会的承認や賞讃を得たいという強い欲求を持っていることは一般に認められている。特に自己評価の低い場合には、自己評価を高めようと強く動機づけられているために、高い評価を与える他者に好意的態度を持つと考えられる。このような、自己評価のいかんにかかわらず、高い評価を与える他者に好意的態度を持ち、低い評価を与える他者に非好意的態度を持つという傾向を reciprocity の傾向という。

consistency の傾向と reciprocity の傾向とは共存するものであり、他者から高い評価を受けることによる快が、自己評価と他者からの評価との不一致による不快をうまわるならば、reciprocity の傾向がみられ、後者が前者をうまわるならば、consistency の傾向がみられる。本研究では consistency の傾向と reciprocity の傾向との相対的強さに影響する要因として協同および競争事態とコミットメントの有無の2つを取りあげ、その効果を明らかにする。

(1) 協同および競争事態の要因について——協同事態では、個人の成績を高めようとする動機が弱く、集団の維

持や成員の友好性を求める動機が強い。成員が緊張から解放され、集団に適応することが必要であり、成員間の相互理解が重要となる。競争事態では、自分の成績を高めることが最大の目標であり、成員間の相互理解は重要でない。したがって、協同事態では自己評価と一致した他者からの評価を、競争事態では他者からの高い評価を求める。すなわち、協同事態では consistency の傾向がみられ、競争事態では reciprocity の傾向がみられる。

(2) コミットメントの有無の要因について——自己の能力の高さにコミットした場合には、その能力についての自己評価の体制が強固になり、変化への抵抗は大きくなる。コミットしていない場合は、コミットしている場合にくらべて、自己評価の体制は弱く、変化への抵抗も弱い。したがって、コミットメント条件では自己評価と他者からの評価との矛盾がより明確に認知される。コミットメント条件で、consistency の傾向がみられ、ノーコミットメント条件では reciprocity の傾向がみられる。

以上の仮説の検証が本研究の目的である。

### 第一実験

第一実験の方法は次の通りである。課題は3名の写真の中から幾つかの性格特性に最もよくあてはまる人を1人選ぶものである。クラス一斉にプリテストを行ない、2、3日後にグループ実験を行なう。1グループは3名からなる。協同および競争事態を教示によって操作する。協同事態には「幾つかのグループの中でどのグループが一番良い成績をとるか調べたいので、他のグループよりも良い成績をとるように頑張ってください」という内容の教示を与え、競争事態には「各グループの中で成績の順位をつけたいので、同じグループの他の人よりも良い成績をとるように頑張ってください」という内容の教示を与える。次にプリテストの成績として被験者の半分には高い成績を、他の半分には低い成績を与えて自己評価の操作を行なう。コミットメント条件ではこの時、自分の成績を他成員に知らせる。

グループ実験は15試行からなる。まず自分の回答を回答用紙に記入し、次に実験者が3名のうち1名を指名し、指名された被験者は自分の答を他成員に知らせる。他の成員は、その回答に賛成か反対かを決め、用紙に記入して渡す。被験者の前にはつい立てがおかれ、用紙はすべてつい立ての前の窓から実験者が仲介して他成員に

渡される。指名された被験者の回答に対する他成員の賛成、反対用紙は実験者があらかじめ操作したものとすりかえて渡す。この時、2名のうち1名は高い評価を与える成員、他の1名は低い評価を与える成員と認知されるように操作された。15試行終了後、各自の回答用紙を回収して点数をつける様子を示し、試行前と一致した成績を与えて自己評価を強化する。他成員に対する態度の測定は、①いっしょのグループになりたいか否か、②お互いに協力できるか否か、③お互いに理解し合えるか否か、④好きか嫌いか、の4項目について質問紙で7段階評定をさせて行なう。

結果は、reciprocityの傾向が4項目総合でも、各項目においても強く支持されている。そしてconsistencyの傾向は明らかには見られなかったがこの傾向が存在することが示唆された。しかし協同、競争事態の要因およびコミットメントの有無の要因についての仮説は全く支持されなかった。

第一実験においては、協同および競争事態の操作が意図通りに行なわれず、質問紙による事態の操作のチェックでは両事態に差がなかった。そこで協同事態において教示による操作のみでなく、グループとしての成績ができるようにしてグループの凝集性が高まるような操作を行って第二実験を行なった。

## 第二実験

第二実験の手続は次の通りである。課題は第一実験と同様のものであるが、今回は5名の中から1名を選ばせる。プリテストは第一実験と同様で20試行である。グループは9名からなる。第一実験と同様の教示を与えて協同および競争事態を操作する。自己評価の操作も第一実験と同様である。コミットメント条件では各被験者個人の成績を知らせると同時に他成員の成績も知らせる。各試行ごとに被験者は自分の回答を回答用紙に記入し、実験者がそれを回収して公表する。被験者は発表される他成員の回答に対する賛否を用紙に記入する。12試行にこれをくり返す。協同事態では、賛成を最も多く与えられた成員の回答をグループの答とし、それが正答と一致すればグループにある点数を与え、12試行の合計点で成績を比較すると教示する。また協同事態では、6試行終了後にグループの成績の中間報告をし、今のところ良い成績だからこの調子で頑張るようにと告げる。12試行終了後、賛否記入用紙を回収して、各被験者ごとに他成員からの賛否をうつしなおして各被験者に返す。この時、他成員8名のうち、4名は高い評価を与える成員であり、他の4名は低い評価を与える成員と認知されるように操作する。同時に、今回の各被験者個人の成績を知ら

せて、試行前の自己評価の操作を補強する。他者に対する態度の測定は、第一実験と同様に、12試行後の質問紙での4項目についての7段階評定によって行なう。

結果は、第一実験と同様、reciprocityの傾向が4項目総合でも各項目においても強く支持された。しかし、協同競争事態の要因とコミットメントの要因についての仮説は共に支持されなかった。そして仮説は修正された。他者からの評価の高低、自己評価の高低、コミットメントの有無そして協同競争事態の4次の交互作用が有意であった。すなわち、コミットメント条件では、協同事態でconsistencyの傾向がみられ、競争事態でreciprocityの傾向がみられ、仮説が支持された。しかしノーコミットメント条件では、協同事態でreciprocityの傾向が、競争事態ではconsistencyの傾向がみられ、仮説と逆の結果が示された。また、協同事態では、コミットメント条件でconsistencyの傾向が、ノーコミットメント条件でreciprocityの傾向がみられ、仮説が支持されている。しかし競争事態では、コミットメント条件でreciprocityの傾向が、ノーコミットメント条件でconsistencyの傾向がみられ、仮説と逆の結果が示された。

協同事態では他メンバーから受け入れられたいという欲求を強く持つため、他者からの高い評価を快に、低い評価を不快に感じる。しかし、一方協同事態では、各被験者はグループの成績に対してresponsibilityを持っているため、過大な評価を受け入れることによって自分の能力以上のresponsibilityが課せられるおそれは強い不安を生じさせる。コミットメントによって自分のresponsibilityの範囲を明らかにした場合には、過大な評価を受け入れることが強い不安をもたらすが、コミットしておらず、自分の能力を明らかにしていない場合は過大な評価を受けることに伴うresponsibilityをまぬがれる。競争事態では、コミットメントによって過大な評価を受けることに伴うresponsibilityをまぬがれるが、コミットしていない場合には、過大な評価を受けることによって自分の能力以上のresponsibilityが課せられる恐れがある。

自己評価の低い被験者が自己評価の高い被験者よりも高い評価を与える他者に対して非好意的態度を持つのは、高い評価それ自体が自己評価と矛盾し、自己評価の体制を崩壊させるおそれがあるためではない。高い評価それ自体は自己評価の低い被験者にとっても快である。本研究で見出されたconsistencyの傾向は、自分の能力以上の高い評価を受け入れることによって自分が果すことのできる範囲以上のresponsibilityを課せられることを避けることによって生じたものである。